



日本を変えた渋沢栄一翁から学ぶ“地域づくり”への姿勢と意識 ～危機への意識・地域への愛着と、群馬に照らされた新たな連携の道筋…

帝京大学 経済学部 観光経営学科 大下ゼミ

謹賀新年。今回は新紙幣の顔として、また来年の大河ドラマに内定した渋沢栄一翁をテーマに、地域づくりへの姿勢と意識をレポートしたいと思います。発表者は、パートナーネットワーク講座2019に参加した愉快的な3人組です。

■ 渋沢、危機管理・危機対応の原点をつくる!!

渋沢栄一翁は、今を生きる私たちに多くのものを遺してくれました。そのうちの1つが震災救護事業です。関東大震災の時に実際に行った活動は、収容所の設置、被災者の収容、臨時病院、掲示板の設置、炊き出しと、現在も行われている活動がほぼ網羅されており、危機対応の原点をつくりました。

渋沢翁は命こそ助かりましたが、被災時にいた事務所は半壊し、身内は故郷の深谷へ戻ることを提案しましたが、「私のような老人は、こういう時にこそ、いささかなりと働いてこそ、生きている申し訳が立つものだ」という台詞を残しました。人生100年時代と言われる今、この考え方が魅力ある地域づくりのヒントになるのかもしれませんが。まさにシニア層のお手本、大下先生もまだまだ頑張れる～…!!

■ 渋沢、王子・飛鳥山(東京都北区)に愛着をもつ!!

渋沢翁は、飛鳥山をこよなく愛し、1879(明治12)年に別荘を構え、1901(明治34)年からは「隈依村荘」と呼ばれている終の住処として本邸を構え、実際に終焉の地となりました。渋沢翁の愛した飛鳥山の旧邸の庭園であったところは、現在、「旧渋沢庭園」として公開されています。

第二次世界大戦でほとんどの建物は失われてしまいましたが、渋沢翁の喜寿のお祝いに寄贈され接客用茶室として使用された「晩香廬」と、傘寿と子爵への昇格の祝いとして寄贈され書庫として使用された「青淵文庫」が当時のまま残っています。青淵文庫には渋沢家の家紋である、丸に違い柏に因んで柏の葉をデザインしたステンドグラスやタイルなどが施されており、ともに国指定重要文化財に指定されています。

北区では、渋沢翁をテーマに地域での様々な取組みが展開されようとしています。今年中には旧渋沢庭園周辺で、東京北区観光協会の数々の渋沢関連の試みが企画されています。

■ 絹と渋沢が新しい広域連携の途をひらく!!

私たちは昨年8月に渋沢関連施設を、そして11月に伊勢崎市の境島村を訪問し、渋沢翁と田島弥平との関係を知りました。日本の養蚕業の発展に大きく貢献した田島弥平と渋沢翁とは親戚筋であったのです。

屋根の上にやぐらを設置し、通風を意識し、蚕室内を自然に近い状態で飼う仕組みである「清涼育」を体系的に完成させのが、田島弥平であることは周知の通りです。世界遺産に登録されている田島弥平旧宅やその周辺の住宅にもやぐらについては、まち歩きをしても往時の雰囲気を感じることが出来ました。

日本の近代化を産業として支えた絹による広域連携が富岡製糸場と絹産業遺産群を中心に展開されています。そこに渋沢翁の活躍をテーマに、深谷・境島村から北区・そして都内の渋沢翁の活躍の舞台へと新しい広域連携が展開されることがイメージされます。「絹関連」は、日本の近代化の“プロセス”を示すものであり、「渋沢翁」は近代化に導いた“精神”を表しているのではないのでしょうか。

近代化への“Process & Sprits”～渋沢翁が照らしてくれているこのキーワードは、群馬の新しい地域づくりの一筋の光となるのではないのでしょうか。

担当(須田巧海・小川菜日留・鈴木哲哉)



青淵文庫のステンドグラス。建物の中は、すごく潇洒な印象～こんなところで渋沢翁が好んで食べたディナーを食べたいと思いました。



渋沢翁の生家「中の家」で、案内人さんから詳しく業績をお聞きすることができました。



渋沢栄一記念館でも学芸員さんから多くの教えをいただきました。渋沢翁は、あまり背は高くなかったようですが、スケールは私たちと比べられない程、大きなものでした。

